

田村慶子

ヒロシマの 夜の病棟から

被爆者日記抄

17歳のときにヒロシマで被爆した少女は、戦後18年めから病床日記を書きはじめた。彼女は、かぎりなく生を希求しながら、原爆とのながい悲惨な日々を耐えて生きぬいた。本書は、被爆患者の日常を克明にしるすことをとおして、すべての被爆者の悲しみと怒りを告げている。

田村慶子

ヒロシマの

夜の病棟から

被爆者日記抄

筆者・編者紹介

田村 慶子 さとし 1928年広島県に生まれる。戦争の混乱のなかで広島県立第一高女に学ぶ。45年8月広島で被爆。長い闘病生活ののち、66年に原爆病院を退院。いらい、後遺症で通院しながら、それまでできなかったことをしたいと、看護婦、和文タイプ、造花教授などの資格をとっている

佐藤 友之 ともゆき 1936年群馬県に生まれる。1960年東京経済大学卒業。高校教師・雑誌記者などをへて、現在は評論・ルポルタージュをてがけている。これまで一貫して被爆者問題を追求しており、おもな著書に『ヒロシマ・愛と死』（共著）、『幻想の平和都市・広島』などがある

ヒロシマの夜の病棟から 被爆者日記

1977年3月31日 第1刷発行

¥1300

著者	田村 慶子
編者	佐藤 友之
発行者	東京都千代田区神田神保町1-46 崔 容 徳
印刷者	東京都文京区後楽2-11-2 道野整版所
発行所	東京都千代田区神田神保町1-46-2 美成社ビル
株式会社 太平出版社 ©	

電話 03-295 3531(代表) 振替東京1-99563

落丁・乱丁本はおとりかいたします

ヒロシマの夜の病棟から——被爆者日記抄 目次

第一章 広島大学病院二〇八号室	16
第二章 病院のメニュー	25
第三章 「白血病」宣告!	48
第四章 点滴注射の日々	71
第五章 日赤広島病院へ	94
第六章 健康になりたい	117
第七章 原爆病院	132
第八章 輸血はつづく	142

第九章「ふるえ」がとまらない……………	160
第一〇章 ことしも生きのびた……………	174
第十一章 血圧異常なし……………	193
第十二章 バラが咲いた……………	211
第十三章 気になる顔のシミ……………	225
第十四章 原爆病院よ、さようなら……………	242
未来にむかって——あとがきにかえて……………	256
田村 慶子	
かぎりない生の証しに——編者あとがきにかえて……………	257
佐藤 友之	

広島大学病院

一九六三年七月一九日～八月一六日

六四年一月一日～七月二三日

日本赤十字広島病院

一九六四年一〇月一日～六五年二月二六日

原爆病院

一九六五年三月二四日～八月三一日

六五年一一月一日～六六年九月二四日

第一章 広島大学病院二〇八号室

一九六三年七月一九日 金曜 晴

入院のため、松村さんにたのんで、かもめタクシーに電話をかけてもらったら、中山〔自宅——広島市郊外〕だから、とことわられた。仕方がないので、バスで八丁堀〔広島市の中心地〕まで出るところにした。途中、矢賀踏切のところでダンブカーが落ち、通行止となり、長い間待たされた。でもなんとか病院までたどりつき、入院できた。

いろいろと注意をうけ、エッセン〔食事〕は極力一〇〇パーセントとる〔全部食べるの意〕ようにする。頭が非常に痛い。右下腹部も。口も痛くて食事のとき困る。二〇八号室は個室なので、たいへんうれしい。ヒーバー〔体温〕も五時過ぎ、七度六分〔体温の数字は「三〇」を省略してある。以下同〕。夕暮になって大家さん〔同棟の被爆患者〕に会いに行った。元氣そうになられ、また肥えていられた。昨年九月に入院され、いままで頑張られたので、あのように年寄りでも健康になったのだと思った。わたしもこんどこそは……。夜、主人が来ないと思っていたら来てくれた。ちよっぴりうれしかった。

金さん〔朝鮮人被爆者、後出の「金同石さん」〕から、蚊取線香をもらうように言われたので、詰所〔看護婦控室〕にいただきに行った。

七月二〇日 土曜 晴

昨夜は蚊もいなくて、二時ごろまではよく眠れたけれど、それからどうしても眠れなかった。検便をだした。エッセンの時に先生がみえた。二階には伊藤先生〔主治医〕の患者はわたし一人と聞き、少々気の毒になる。うがい薬がきた。うがいをすると、口中がスーッとして快い。月曜日の骨髓穿刺〔骨髓から血液をとっておこなう検査〕が気にかかる。午前中よく眠れた。夕方検尿あり。夜、清拭〔ベッドで体を拭き清めること〕をした。

七月二一日 日曜 晴

体重測定三八キロ。宵のうちはよく寝たけど、夜中起きていた。朝方少々眠れた。木村さん〔県立病院で同室だった患者〕に会った。割合に元氣そうになっていられた。帰室すると、伊藤先生がみえていられた。日曜日でも診^みに来られて、恐縮した。頭痛がひどいので痛み止めをもらった。下痢止めがでた。夕方、主人が来た。明日は骨髓穿刺があるので、夜病室に泊まってもらうことにした。木村さんたちが来るかと待っていたが、とうとう来なかった。

七月二二日 月曜 晴

午前中はよく寝た。午後こわいと思っていたボーン・マロウ・パンクチャー〔骨髓穿刺〕をした。このたびは、腰から採血された。RBC抵抗検査〔血液検査の一種〕と出血時間を調べられた。胸から採るほど痛くなかった。二時ごろ、良子ちゃん〔姪〕が来た。

七月二三日 火曜 晴

検温後、売店に行った。収入印紙とインク、はがき、コップを買った。とても遠く感じた。歯科の外来に行きたいけど、これではとても行けそうもない。入院手続きをした〔手続きするまえに入院していた〕。おなかの具合が悪かったけど、昼ごろからよくなった。朝、血液を採った。一五cc入用なのに、二度に分けても一〇cc余りしか採れなかった。バファリン〔消化剤〕が割合にいい。三時過ぎに朝長教授の回診あり。とてもよく診ていただいた。あと、伊藤先生の話では、薬の飲みすぎで造血機能障害が起きているらしいので、もう少しやすをみるように、と話された。エッセン一〇〇パーセント。一一〇号室に看護婦さんが入院された。

七月二四日 水曜 晴

たいへんよく眠れる。朝も昼も、食事のたびに起こしてもらった。検便をだした。相変わらず尿が少ないし色が悪い。血清鉄も少ないとのこと。うがい薬をもらった。夕食の時、主人が来て、魚釣りに行くとのこと。お湯を汲みに行ったら、非常に頭が痛くなった。ビオタミンがきた。

七月二五日 木曜 晴

一日中眠っていた。朝、PSP〔腎臓の機能検査〕あり。吐き気があった。採血あり。輸血をする予定だったが、のびた。非常にだるく、付添さんをたのまなければと思っていたが、夕方、木村さんに会っている話をして元気になった。木村さんが遊びに来てくれて、ほんとうにうれしかった。内科・外科の先生方ともに非常に感謝しているとのこと。わたしも内科の先生には感謝している。自分の病気に苦しみ、部屋の人たちといやな思いをし、そのうえ、根本〔県立病院で同室の患者〕にいじ

められていた時のことを思うと、今はほんとうにパラダイスだと思う。一回目の入院料請求書一九二〇日の二分で四〇〇円〔個室差額代〕。さっそく支払いに行った。一日二〇〇円でこんなに楽なので、病氣も日増しによくなる気がする。高蛋食になった。

木村さんが体重四〇キロになったと喜んでいられた。冬のころはわたしの方が一二キロほど多かったのに、今では木村さんの方が二キロ多い。それから松原さん〔県立病院で同室の患者〕のことを聞いた。氣の毒だが、こんどはだめかもしれない。あごの骨をはずすんだそう。それにガンらしく悪いにおいがするそう。夕方、主人が桃と瓜を買って来た。

七月二六日 金曜

いい氣持で眠っていたら、小園先生の回診があった。輸血はもう少し延期になった。血液一般とRBC抵抗検査があった。ハルン〔尿〕が昨夜から非常によく出るようになったが、回数割に量が少ない。色も黄色でコート〔便〕シュトウール・コートの略。以下同〕もよい。佐々木さんからつかしい手紙が来た。県立病院では大谷先生や福岡さんや部屋の人たちが非常に心配したとのこと。ほんとうに帰ると思わなかったらしい。明日は田中先生が二〇cc採血し、検査後、半分返すとのこと。目がまわらぬようにたくさん食べておくことにしよう。はがきを全部書いたので、主人にだしてもらおうたのんだ。

七月二七日 土曜 晴

午前中、先生がみえ、診察後、来週休むので田中先生が代診されるそう。昼ごろ採血にみえ、今

日から輸血すると言われ、四〇〇cc輸血した。少々かゆくなり、八つほどホロセ〔吹きでも〕がでた〔輸血の副作用〕が、たいしたことはなかった。尿が午前中は淡黄色だったのに、午後からかっ色になった。ヒーバー七度九分。頭が非常に痛い。一つ残っていた二〇ccの血液検査は、体が弱っているのではないらしい。輸血後、血色が少しよくなったような気がする。

七月二八日 日曜 晴

体重測定三九・五キロ。体重が増したのにおどろく。眠ったのがよかったのだろうか、輸血がよかったのか。今日は、ホロセが体中にでて、レスタミンを注射してもらった。相変わらず頭が痛い。主人が帰ったあと、良子ちゃんとシズ江さんが来てくれた。二一二号室の八木さんが早朝死んだ。ズボン下を脱いだら、今日は一五回ほど、トイレットに行く。患者の中村さんが行くえ不明になった。

七月二九日 月曜 晴

ヒーバー七・〇、七・六、八・八、八・六度。熱が少々出た。輸血は、一本〔二〇cc〕だけ。ホロセ七、八つ。伊藤先生が休みなので、岡田先生が代診。検尿あり。頭と下半身が痛かった。痛み止めを注射してもらったら、頭だけよくなった。夕方、主人が来て、足をもんでくれた。腰も足も痛いけど、あまり無理は言えない。中村さんがみつかった。病室をぬけだして、帰宅しているのを発見された。

七月三〇日 火曜 晴

朝長教授の回診あり。こういうふうにコップ・シユメルツ〔頭痛〕を感じるクランケ〔患者〕は、

レジェプト〔処方〕をだすよう〔主治医から〕指示された。その時、故沼本シズ江さん〔慶子さんと同じ「再生不良性貧血症」の被爆患者〕の話がでたので、ゾツとした。〔死亡した被爆者と同じ病状だと医師たちが話しているのを聞いたため〕。ヒーバーがあるにもかかわらず、赤血球が約 240×10^4 で少ない。白血球は 310×10^3 、ザリー〔鉄分〕七・二〔通常、一般女性の赤血球は 450×10^4 、白血球は 700×10^3 〕。頭痛のため、痛み止めを注射していただいた。台木さんからはがきがきた。

七月三十一日 水曜 晴

田中先生が代診された。明日、血液検査あり。少々心ぼそい。今日からサイアジンのようなのが投薬された。〔次の歌は日記のなかにあったはしり書き〕。

白血病と知らぬ妹の手足まで

ひたすら生きと姉は念じつ

八月一日 木曜 晴

たいへんよい天気で、朝から工事〔病院内の建設工事〕をすすめていた。快く眠れ、今日は頭も痛くない。でも下腹はぐしぐしとする。四時過ぎ岡田先生がみえた。田中先生はABC〔アメリカ原爆傷害調査委員会〕へ行かれたため、検査はのびた。五時過ぎ沼本さんがみえた。広大〔広島大学医学部付属病院〕の調理室に勤務することになったといっておられた。生涯の革命をするとか……。わたしシズ江さんと立場がかわっていたらどうだろう。沼本さん〔シズ江さんの夫。シズ江さんが亡くなられてから、被爆者のために働きたいと調理室に住込んでいた〕にいいお嫁さんの世話でもする

かしら。蚊取線香を三袋もらった。

八月二日 金曜 晴

原水協〔原水爆禁止日本協議会〕の方が一階にお見舞いに来られた。果物をいただいた。午後から検査があるので、昼食は欠。工事が済んで、ブルドーザーが来ないのでほっとした。午後、さっそく検査あり。まず血液を二三cc完全消毒で採血された。一〇ccほど血清のようになり、再び注射をしてもらった。その三、四分後、四時、四時半、五時半、六時半と五回採血された。被爆者へのお見舞いとして一二〇〇円、原水協から送られた。なにか記念品を買うことにする。

八月三日 土曜 晴

沼本さんが来て下さった。久しぶりに伊藤先生がみえた。夕立が少しあった。夜から熱が出て、セデスを半分飲んだけど、ホロセが七、八つでた。入院費二二〇〇円払った。

八月四日 日曜 晴

主人に時計を買ってもらった〔原水協からの見舞金で、記念にと時計を買った〕。朝からヒーバー〔熱〕が高く、痛み止めをしてもらった。ヒーバー〔体温〕八・二、八・七、八・三、八・六度。昨夜から一日中熱が高く苦しかった。顔と足腰が痛みつづけた。夜、鎌田先生がみえた。

八月五日 月曜 晴

ヒーバー七・二、七・六、七・六、七・八度。顔と下腹が痛い。気分はよい。先生がみえて採血され、明日クリスティール〔浣腸〕をして、X線科へできるように言われた。貧血も少々よくなってきて

いるとのこと。夜、主人がおさしみと、すしを持って来てくれた。とてもおいしかった。

八月六日 火曜 晴

ヒーバー七・四、八・二、八・四、八・五度。一〇時にクリスティールをして、被内外来へ行き、血液検査をした。一二時ごろX線科へ行った。二時ごろから朝長教授の回診あり。ザリー一〇・三グラム。優秀なり。宗教団体からお菓子をいただいた。夕方、主人がお中元を持って来た。

八月七日 水曜 晴

ヒーバー七・四、七・五、七・五、七・五度。貧血がたいへんよくなったそう。うれしい。主人は釣りに行くとかで、来なかった。頭、右下腹はやはり痛い。詰所に中元をたのんだ。一階で藤田さんと松原さんに会った。松原さんはいんやせていた。どうも再発らしい。反対側が大きくはれて、少々においもある。非常に気の毒に思う。今一一時三〇分。寝ていてもあれこれ思うと寝つけない。

八月八日 木曜 晴

カテーテル尿を採り、中検にだされた。

八月九日 金曜 曇

台風がくるという。朝から腹痛で起きれない。

八月一〇日 土曜 雨

台風は何事もなく過ぎた。木村ミヤ子さんが退院するとて、挨拶にみえた。熱が下がって、らくになった。夜九時ごろ、佐々木さんに電話した。まだ帰らない由。

八月十一日 日曜 曇

体重測定三八キロ。昼過ぎに伊藤先生がみえた。松村さんが千津子ちゃんと一緒に来てくれた。

八月十二日 月曜 晴

おなかが痛い。血液検査あり。夜、鎌田先生がみえた。

八月十三日 火曜 晴

二〇七号室の金さんがOP「手術。オペラチオン」をした。朝長教授の回診あり。四時半ごろ、呉病院で同室だった西谷さんが来てくれた。ほんとうに来るとは思わなかった。

八月十四日 水曜 曇

朝から腹痛あり。午後よくなった。お盆なので、外泊「帰宅」する人が多い。今日から三日つづけて検便すること。やはりよく食べ、よく眠れる。

八月十五日 木曜 晴

山崎の婦長さん「姪の良子さんが勤務している広島市内・山崎病院の婦長さん」と静江さん「山崎病院の看護婦さんで、良子さんの友人」が来た。

八月十六日 金曜 晴のち雨

二〇七号室の恵南さんが六時半ごろから、人事不省となり、一日中大きな音をするのに閉口した。四時ごろ、良子ちゃんが来てくれた。山崎のおばあさんから果物と菓子をとづかってきた。帰りは主人の單車に乗って帰った。夜眠れないので薬をもらって飲んだら、胃が痛くなり、今、午前三時だ

けど、眠れそうにない。隣室はにぎやかすぎて困る。小園先生の回診があった。クリーニングへ行ったら、休日だった。今日で検便がすんだ。断水した。

第二章 病院のメニュー

一九六四年一月一日 水曜 晴

病院でお正月を迎えた。別にこれといった感想もない。とにかく今年こそは健康になり、退院しよう。一二時少々前に二〇七号室の龍原さん〔被爆患者、白血病〕が和朗先生に臨終をみてもらった。日ごろ意地悪でボスぶりを発揮していたが、最期は非常にあわれだった。あとで生前の龍原さんについて大悪口の花が咲いた。スチームが故障なのでたいへん寒い。昼過ぎに、家にきた年賀状を持って主人が来てくれた。速谷神社に参拝したそうだ。お正月早々、死亡者がでて、いやだ。

一月二日 木曜 晴

毎晩眠れないので食間薬を二包み、就寝前に飲んだら、夜中にトイレに歩いて行ったけど、帰りはふらふらで困った。和朗先生が元氣よく「おめでとう」と入って来られたが、口が思うようにきけず年始の挨拶もできず残念だった。二度目に来られた時は、眠たくて、なにか言ったけど、覚えていない。一二時半まで快く寝た。二〇七号室のボスがなくなったので、室内がのんびりしている。口の

痛いのは少しよくなったが、トンジレ〔扁桃腺〕にまだ黄色なのが付いている。歯は相変わらず。シユタイン〔体内結石〕、コリーティス〔大腸炎〕、コップ・シュメルツ〔頭痛〕はよくない。

一月三日 金曜 晴

ボスがいないので二〇七号室のテラスに神笠さんといっしょに洗濯物を干した。入浴して帰ったらスチームが入っていた。隆明先生がみえた。夜、おすしと、おさしみを持って〔主人が〕来てくれた。少し食べた。美味だった。中原のお姉ちゃんがカステーラをくれた。

一月四日 土曜 晴

コップ・シュメルツがひどく、昨夜は一時に注射してもらって一二時四五分寝ついた。詰所に行ったら、鎌田先生がいらした。挨拶をして、龍原さんの話をした。たいへん信用しているといわれた。一年あまり同室の人をあれだけ困らしていたのに、ばけの皮もはげずと感心す。わたしなどボロが現われどおしだ。少し見習いたく思う。カステーラを二本食べた。朝から下痢する。言わないつもりだったのに、夜の検温の時、主任さんについて口がすべった。朝、ボロをださぬようにと思ったのに、やはりだめだ。

一月五日 日曜

体重測定三七キロ。〔主人は〕今日から勤務だそう。暮れのうちは帰りたくていらいらした。けれど、新年になったら気分がおちついた。こんどこそは全快したい。体重も増加した。頭さえよくなればと思う。